

アイヌの挨拶表現と民俗的修辞構造

大喜多 紀明

アブストラクト

アイヌ語は現在、消滅危機言語とされ、実質的な話者の数が少ない。文化的側面を考慮した立場でアイヌ語を学習するためには、構文に反映した民俗性を配慮すべきである。本稿では、1957年から1997年にかけて採取された、アイヌ口承話者による、三点の、アイヌ語による挨拶文をテキストとし、それらの修辞論的分析を行った。その結果、テキストから、交差対句を主要な修辞とする構造様式を見出すことができた。こうした対称性の高い表現法は、アイヌの民俗的属性に関連するというのが本稿の前提である。

キーワード：アイヌ語、挨拶表現、交差対句

1. はじめに

アイヌ語は現在、消滅危機言語とされている。近年では、アイヌ語の学習会が以前に比べて多く企画されるようになり、また、学術的な研究も継続されているが、アイヌ語を母語とする話者は激減しており、言語における危機的な状況については変わりが無い。

言語と文化には互いに強い関連性がある。言い換えれば、民俗的な精神生活は、容易に言語の在り方に反映する。アイヌ文化でも同様に、アイヌの会話表現の様式は、民族的な心意に影響を受けると考えられる。筆者は、アイヌの神謡にみられる交差対句を、以前の論文で示した。(大喜多, 2011:24-32) 本稿では、ネイティブのアイヌ語話者三名(二谷善之助さん・鳩沢ふじのさん・上田トシさん)による三種の「挨拶言葉」に確認できる対称表現を紹介した。

2. 「対称性」を嗜好するアイヌの属性

アイヌの文様を見てみると、その多くは、美しい対称的な幾何学図形で構成されている。同様に、アイヌのカムイ・ユカラ(神謡)やウエベケレ(散文説話)にも修辞的な対称表現を見出すことができるのである。以下、カムイ・ユカラおよびウエベケレに見出される対称表現の事例を紹介する。

対称表現の一つは「対句」である。対句は、アイヌ口承文芸にはよく使用される修辞技法の一つである。例えば、『アイヌ神謡集』(知里, 1978)に掲載された「小オキキリムイが自ら歌った謡『クツニサ クトクトン』」には、次のような箇所がある。

見ると、胡桃の築

なものであるから、A 胡桃の水、A´ 濁った水

が流れて来て鮭どもが

上って来ると胡桃の水が嫌なので

泣きながら帰ってゆく

水源から B 清い風、B´ 清い水が

流れて来て、泣きながら帰って行った

上掲の「A 胡桃の水、A´ 濁った水、」および「B 清い風、B´ 清い水」では、それぞれ、同じような意味の言葉が、異なる語句で重ねられている。このような語句の連なりが「対句」である。ここで紹介したような神謡(アイヌ・ユカラ)だけではなく、散文昔話(ウエベケレ)や日常会話文でも、対句は比較的に汎用される修辞技法である。

さて、このような対句は比較的に単純な対称表現の技法であるが、アイヌの文芸では、より複雑な修辞技法である「交

差対句」がしばしば見出される。その一例として、平村幸作さんを話者とするウエベケレ「平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました」(1957年10月27日録音)を紹介する。以下に、その全文(田村, 1989:58-63)を記載する。(下線・記号は筆者による)

A 平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました。貧乏ですから、つぶれかかった家に住んでいました。飢饉になって食物もなくなったときに、B オキクルミ神の奥様が海産物の食糧を配給しに村じゅうを配り歩きました。その村の下のはずれに住む貧乏人夫婦のところにも鯨の脂肉をつかんで、窓から差し出したときに、その手を見ますと、とてもきれいな白い手を指しのべましたので、貧乏人夫婦は、

「(その手が脂肉よりも) 一体どんな顔をしたものの手がこんなに美しいのだろう？」

と、貧乏人夫婦は話し合いました。

こう言って相談しました。

どんな体つきをしたもので、その手が美しいのだろう。その手を両方から、脂肉を入れるとき、つかんで引けば、体を見ることができるから、そのようにしようと、貧乏人夫婦は相談しました。

そして、村じゅうに、まだ日が出る前から、そのオキクルミ神の奥様が、鯨の脂肉を家ごとに配りながら下って来たのですが、その貧乏人夫婦の家で、また、窓から鯨の脂肉をつかんで手を差し出した時に、貧乏人夫婦は両方から待ちうけていたものですから、その脂肉をつかんだ手の腕を、

ふたりして両方からつかんで引っぱりました。

すると、東側の床の上で、小さいシャチが身もだえました。

すると、その貧乏人夫婦の家の上で、バリバリッと大きな音がしました。雷が落ちたのでした。

すると、その貧乏人夫婦は気絶して、人事不省になりました。

すると、

「どうしてか、村の下のはずれに雷が落ちた。

雷の音もしないときに、雷が落ちたらしい音がしたぞ。

貧乏人夫婦が C 神様の咎めを受けることをしたのでなくて、こんな音がするのだろうか？」

と、村長が言いました。

そして、若者たちを、その貧乏人夫婦の家へ、走らせましたところ、貧乏人夫婦はふたりして気絶していました。

そして、東側の床の上に、オキクルミの奥様が配った脂肉がポイと捨ててありました。

ですから、オキクルミ神から D 村長の奥さんへ、次のように夢を見させました。

「E 人間の村が飢饉になって、F 人間をかわいそうに思い、G 私の村を憐れに思ったので、H 海の神様の娘を妻にしていたのだったが、貧乏人夫婦が私の妻の I 腕をつかんで、I' 引っぱったので、H' 妻はシャチだから、東側の床の上に表れた体を貧乏人夫婦は見たのだ。

そのことに、G' オキクルミ神が腹を立てたので、もうこれからは、F' 脂肉を人間に配り与えさせないから、貧乏人夫婦をどこか、他の川筋へでも E' 他の村へでも、追い出してもして、そうしたら、また、お前たちに食べさせるが、そうでなければ、脂肉をお前たちに食べさせないぞ」

と D' 村長も夢を見、奥さんも夢を見ました。

それから、村の下のはずれに住む貧乏人夫婦は追い出されても、そこへ行って食べる所もなく、住む所もないものですから、C' 神様におおびをしました。オキクルミ神に村じゅうが御幣を削って、酒を作って、おおびをしました。

ですから、それから、また、B' オキクルミ神の奥様は脂肉を配りました。けれども、その、貧乏人夫婦は、咎めを受けるようなことをしたために食べさせてもらえませんでした。ですから、

A' 「貧乏人はよくしてやると、悪い心、その悪い心のせいで、よい心をもっている金持ちも、貧乏人夫婦のとばかりを受け、咎められ、物をもらえず、神様がかえりみてくれないのだから、貧乏人というものは、決して憐れむ

ものではないぞ

と、村長が言いました。それで、平取では、本当の貧乏人は憐れまれないのです。

と平取の長者がいましめの話をしなが、年老いて死にました。

このウエペケレには、いくつかの交差対句が散見できるのであるが、このウエペケレに見出せる中でも、最も規模が大きいと思われる、合計9対の対応を持つ交差対句をここでは記載する。なお、修辞の呼称については、他にも様々な呼び名があろうが、便宜上、本稿では、「交差対句」で統一した。

本稿では、例えばA→B→C→C´→B´→A´のように、複数の語句が語順を逆転させて配列される構文を「交差対句」としている。ただし、語句が配列される時、全く同じ語句が再現されて配列される場合もあるが、意味が類似した語句に置換されたり、逆に、正反対の意味の語句に置換される場合もある。一方、対句の場合は、例えばA→A´や、A→B→C→A´→B´→C´のように、語順を変えずに語句が反復される構文である。

A 前文

B 脂肉を配るオキクルミの奥様

C 貧乏人夫婦による咎を受ける行為

D 夢を見る

E 人間の村の飢饉

F 人間をかわいそうに思う

G 村を憐れむ

H 海の神の娘

I 腕をつかむ

I´ 腕を引っ張る

H´ シャチ

G´ 腹を立てるオキクルミ

F´ 人間を憐れまない

E´ 他の村へ追い出す 食べさせない

D´ 夢を見る

C´ 村人による詫び

B´ 脂肉を配るオキクルミの奥様

A´ まとめ

上記のように、このウエペケレには、I・I´を核とする対称的な修辞構造を見出すことができる。I・I´の両脇には、A～HとA´～H´の対応が綺麗に配列している。

本項で紹介した(ような→削除)「対句」や「交差対句」のような対称表現は、アイヌ文芸における特徴的修辞の一つであると筆者は解釈している。(大喜多, 2011:24-32)

3. 挨拶言葉の構造

本節では、二谷善之助さん、鳩沢ふじのさん、上田トシさんが、それぞれ挨拶を行った時の構文をテキストとし、その構文にみられるいくつかの統語的な特徴を分析した。

3.1 二谷善之助さんの挨拶言葉

はじめに、二谷善之助さん(以下敬称を省略する)を話者としたアイヌの挨拶言葉を紹介する。(田村, 1988:2-3) この資料は、アイヌ語研究のフィールドワークの一環で北海道沙流郡平取町字二風谷を訪れた田村すず子(旧姓福田)に対

して、二谷が初見の挨拶をした時の記録資料である。(1957年10月24日録音)採録された言語はアイヌ語であったが、ここでは和訳した文章のみを記載した。(下線および記号は筆者による)

- A 若い娘さんのあなたに、今はじめて会いました。とは言っても、和人の方々ばかり住む大都会からあなたがおいでになることがあると私は聞いていました。
- B それから、あなたがおいでになったら、なんでもよく教えてあげたい、見せてあげたいとは言っても、C あいにく、今日は立派なアイヌは仕事のためとはいいいながら、みんな出払ってしまったあとに来て、D 私ひとりしかないよう
にお話して、あなたにも気の毒に思っていました。
- D´ とはいえ、ひとりかふたり、私たちが昔持っていた楽しいお話をすることになるでしょう。C´ そのうちのひとつでも、あなたが持って行かれたら、私はよかったなと思って安心できるでしょう。
- B´ 私がたくさんしゃべってもよくないから、これまでにしておきます。A´ あなたがどこに旅するにしても、無事に旅するように、このことは神様にもお知らせしていますから、どうぞよい心を持ち、いつまでも健康な体を持って暮らされますように。

二谷による挨拶の言葉は上記のようなものであった。この文章を、筆者が施した記号・下線に従い、配列すると、次のように表現できる。

- A 若い娘さんのあなたに、今はじめて会いました。とは言っても、和人の方々ばかり住む大都会からあなたがおいでになることがあると私は聞いていました。
- B それから、あなたがおいでになったら、なんでもよく教えてあげたい、見せてあげたいとは言っても、
- C あいにく、今日は立派なアイヌは仕事のためとはいいいながら、みんな出払ってしまったあとに来て、
- D 私ひとりしかないようにお話して、あなたにも気の毒に思っていました。
- D´ とはいえ、ひとりかふたり、私たちが昔持っていた楽しいお話をすることになるでしょう。
- C´ そのうちのひとつでも、あなたが持って行かれたら、私はよかったなと思って安心できるでしょう。
- B´ 私がたくさんしゃべってもよくないから、これまでにしておきます。
- A´ あなたがどこに旅するにしても、無事に旅するように、このことは神様にもお知らせしていますから、どうぞよい心を持ち、いつまでも健康な体を持って暮らされますように。

A では、二谷が、田村とは初めての対面であるということと、そこに至るまでの経緯が話されている。それに対し、A´ は、田村が二谷のもとを離れたあとの無事を念願する内容である。

また、B では、二谷が、なんでもよく教えてあげたいという意味を表明しているのに対し、B´ では、この場ではあまりたくさん言葉を話してはいけないという意味を表明している。B´ での、たくさん教えたいことは「アイヌ語」であろうが、一方の B´ でたくさんしゃべるべきでないとしているのは二谷による「挨拶」であると理解できる。ここでは「アイヌ語」と「挨拶」という違いはあろうが、いずれも、二谷が田村に「話を伝えること」という点で一致している。B は、「たくさん伝えたい」という意思の表明であり、B´ は、「あまりたくさん伝えてもいけない」という意思の表明であろう。

C・C´ は、「出払う」と「持って行く」という類似した表現が対応していると解釈できる。さらに、D・D´ では、「話をする」という言葉が一致している。

こうした対応関係を踏まえ、配列した交差対句を簡略化すると、次のように表現できる。

- A 出合い (過去→現在)

- B 教えてあげたい (過去→現在)
 C 出払う (過去→現在)
 D 話聞かせる (過去→現在)
 D´ 話聞かせる (現在→未来)
 C´ 持って行く (現在→未来)
 B´ 話をやめる (現在→未来)
 A´ 別れ (現在→未来)

AからDまでは、過去から現在に至るまでの経緯説明に費やされ、D´からA´には、その時点から未来に至る出来事が描かれている。

以上のように、二谷による挨拶言葉は、非常に対称性に富んだ構造であることが解る。

3.2 鳩沢ふじのさんの挨拶言葉

続いて、鳩沢ふじのさん（以下敬称略）を話者とした別れの挨拶（田村, 1987:92-94）である。（1961年4月7日録音、採録地：北海道沙流郡門別町字福満）この記録資料には、以下のような、記録者である田村の言葉が付け加えられている。

皆で楽しくすごしたあと、私がもう立ち去ろうというときに、頼んだ車が来るのを待っている数分の間にワテケさんが吹き込んでくれた、しめくくりと別れの言葉である。お酒と歌で気分が高揚しているの、たいそう明るく話している。『アイヌ語音声資料 1』の会話と同じく、自然な話し言葉である。

つまり、前項にある、二谷による出会い挨拶の状況とは若干異なり、鳩沢による別れの言葉であると同時に、話者が「酒と歌で気分が高揚した」時に採録された、より「自然」な話し言葉であると、田村は判断している。以下、採録された挨拶の和訳を掲載する。（記号・下線は筆者による）

A今日は、4月7日という日で、鍋沢タケという姉さんのところに、B東京の先生、B´福田すず子という先生が泊まっています。A´もう今日で7日、泊まっています。

その場所に、私たちの村の若い女性たちが集まって、この、もっといろいろ声を出してやっている、動きながらまわっているものを、見ている人もいるし、見ていない人もいるので、Aほんとうに皆楽しんでます。そして聴いては、笑って笑って笑いころげています。ある時は集まってBヤイサマを歌い、B´ホリッパをして、そんなことでA´私たちは楽しんでます。

どんなもんだか、東京から来た先生は、Aほとんど仕事もしないで、私たちがこんな遊びばかり言ったりしたりするので、おもしろくもなんともないでしょうね。Bちょっとばかし腹が立っても、怒ることもできないで、Cクスクス笑いながらも、D私たちはこのようにしていましたが、E今日はもう、行くというので、私はおなかの中で泣いているけれど、うわべはまるで笑っているみたいにして、私の心は悲しくてつぶれる思いです。F今行ったら、またいつになったら会える予定で、G今日はお別れするのでしょう。G´今日はお別れしようとして、F´もうまもなく、乗って走る車を呼んだので、来るらしいということです。E´それでいつそう、その車が来たらまた涙もポロポロポロポロこぼしながらでも、私は、ひとりで、残ることになるのでしょうね。

でも、ここの家の坊やも「声をたてるんじゃないよ」と、D´私たちは毎日言いくらしていながら、そのあとでかわいそうになって、C´とってもハハハハハ（笑い声）ああ、ほんと、B´まったく私の坊や何もわからずどうして叱られるのかもわからなくて、A´このように私たちは 毎日言いながら、今まで何日かすごしたのですが、今日はまたこれまでにします。このようにして終わりだそうですわ。

ここでの挨拶言葉にも、下記のような配列構造を見出すことができる。

- A ほとんど仕事もしないで、私たちがこんな遊びばかり言ったりしたりするので
 B ちょっとばかし腹が立っても、怒ることもできないで
 C クスクス笑いながらも
 D 私たちはこのようにしていましたが
 E 今日はもう、行くというので、私はおなかの中で泣いているけれど、うわべはまるで笑っているみたいにして、私の心は悲しくてつぶれる思いです
 F 今行ったら、またいつになったら会える予定で
 G 今日はお別れするのでしょう
 G´ 今日はお別れしようとして
 F´ もうまもなく、乗って走る車を呼んだので、来るらしいということですから
 E´ それでいっそう、その車が来たらまた涙もポロポロポロポロこぼしながらでも、私は、ひとりで、残ることになるのでしょうね。
 D´ 私たちは毎日言いくらしていながら
 C´ とつてもハハハハハ (笑い声)
 B´ まったく私の坊や何もわからずどうして叱られるのかもわからなくて
 A´ このように私たちは 毎日言いながら、今まで何日かすごしたのですが、

G・G´を核とした、合計7対の対応が、修辭的に美しく配列されている。GとG´には共通した「今日はお別れ」という言葉が配置されている。

AとA´について見てみると、両方ともに、「毎日言いながら過ごした」様子が描かれている。B・B´は、「立腹」する対象は異なるが、「立腹」するという感情表現は共通している。また、C・C´は共に「笑い」という点で一致している。

Dの「このようにしていた」行為は、D´に書かれた、「言い暮らす」ことであると思われる。Fは、次に「会える」未来についてであり、F´では、「迎えの車が来る」という近い未来についてである。

加えて、ここでの挨拶言葉には、さらに異なる交差対句がある。挨拶の前半箇所を見てみると、次のような記号と下線を付すことができる。

今日は、4月7日という日で、鍋沢タケという姉さんのところに、A 東京の先生、福田すず子という先生が泊まっています。もう今日で7日、泊まっています。

その場所に、B 私たちの村の若い女性たちが C 集まって、この、もっといろいろ D 声を出してやっている、動きながらまわっているものを、E 見ている人もいるし、E´ 見ていない人もいますので、ほんとうに皆楽しんでます。D´そして聴いては、笑って笑って笑いころげています。ある時は C´ 集まってヤイサマを歌い、ホリッパをして、そんなことで B´ 私たちは楽しんでます。

どんなもんだか、A´ 東京から来た先生は、ほとんど仕事もしないで、私たちがこんな遊びばかり言ったりしたりするので、おもしろくもなんともないでしょうね。

- A 東京の先生、福田すず子という先生
 B 私たちの村の若い女性たち

C 集まってD 声を出してやっている、動きながらまわっているE 見ている人もいるしE´ 見ていない人もいるD´ そして聴いては、笑って笑って笑いころげていますC´ 集まってB´ 私たちA´ 東京から来た先生

上記の図式では、合計5対の対応を確認することができる。AとA´は、両方ともに「東京」から来た「先生」についての記述である。また、B・B´には「私たち」、C・C´には「集まって」という共通語句がそれぞれある。

Dでは「声を出す」のに対し、D´では逆に「聴く」ことが書かれており、Dの「動き回る」行為と、D´における「笑い転げる」行為は、両方とも躍動した行為という点で一致している。また、Eの「見ている人」とE´の「見ていない人」は、正反対の意味を持つ言葉である。

さらに、鳩沢の挨拶に配置された二つの小さい交差対句を紹介する。(下線・記号は筆者による)

A今日は、4月7日という日で、鍋沢タケという姉さんのところに、B東京の先生、B´福田すず子という先生が泊まっています。A´もう今日で7日、泊まっています。

Bの「東京の先生」とB´の「福田すず子という先生」を一瞥すると、いわゆる対句表現に見える。ところが、その両脇にはA「今日は、4月7日という日」とA´「もう今日で7日」という類似した言葉が配置されている。したがって、この箇所は、対句というよりも、むしろ、交差対句であると解釈するべきであろう。

次の部分にも、規模の小さな交差対句が確認できる。(下線・記号は筆者による)

見ている人もいるし、見ていない人もいるので、Aほんとうに皆楽しんでます。そして聴いては、笑って笑って笑いころげています。ある時は集まってBヤイサマを歌い、B´ホリッパをして、そんなことでA´私たちは楽しんでます。

A ほんとうに皆楽しんでますB ヤイサマを歌いB´ ホリッパをしてA´ 私たちは楽しんでます

ここでは、B「ヤイサマ」とB´「ホリッパ」が列挙されているが、両側にA・A´「楽しんでます」があるので、交差対句であると解釈できる。

さて、鳩沢の挨拶は、田村によると、話者が「お酒と歌で気分が高揚している」時に、「たいそう明るく話し」た挨拶である。このことは、表出された交差対句が、鳩沢にとっては、ごく「自然」な修辭であることを示唆している。

3.3 上田トシさんの挨拶言葉

さらに、上田トシさん(以下敬称略)の挨拶言葉を紹介する。(アイヌ民族博物館 編, 1997:1) 上田による言葉は、出会いや別れの際に語られた言葉ではなく、アイヌ語を学ぶ人たちに向けての挨拶としての言葉である。以下にその文章を記載する。(記号・下線は筆者による)

A 私はなにか物を知っている年寄りというわけでもないのですが、B どういうわけか若者たちや女の人たちが私を訪ねてきてくださるので、C 私はそのことをたいへん嬉しく思いながらアイヌ語でおしゃべりをしています。D アイヌ語といたしましても急にわかったものではなく、E 私は最初はアイヌ語を知らなかったのです。E´ けれどもなんとかしてアイヌ語を覚えたいので、D´ 歩きながらでもアイヌ語で独り言をいいながら歩き、寝ていて目が覚めてもアイヌ語ばかり考えながら暮らしているうちに、C´ 今はもう年をとりました。私が元気でまだお話することができる間に、アイヌ語でもウエペケレでも言いますから、B´ 和人の若者や和人の女性、アイヌの若者、アイヌの女性、だれであっても、A´ 私のウエペケレやアイヌ語をよく聞いて役立ててください。そのことだけを私は思っています。ありがとうございます。

上記の文章も、瞥見すると、交差対句があるようには思えないが、精査すると、以下に示す交差対句を確認することができる。

- A 私はなにか物を知っている年寄りというわけでもないのですが
 B どういうわけか若者たちや女の人たちが私を訪ねてきてくださるので
 C 私はそのことをたいへん嬉しく思いながらアイヌ語でおしゃべりをしています
 D アイヌ語といたしましても急にわかったものではなく
 E 私は最初はアイヌ語を知らなかったのです
 E´ けれどもなんとかしてアイヌ語を覚えたいので
 D´ 歩きながらでもアイヌ語で独り言をいいながら歩き、寝ていて目が覚めてもアイヌ語ばかり考えながら暮らしているうちに
 C´ 今はもう年をとりました。私が元気でまだお話することができる間に、アイヌ語でもウエペケレでも言いますから
 B´ 和人の若者や和人の女性、アイヌの若者、アイヌの女性、だれであっても
 A´ 私のウエペケレやアイヌ語をよく聞いて役立ててください。そのことだけを私は思っています。ありがとうございます

A では上田は謙遜し、何か知っている訳ではないと言っているが、A´ には、上田の「ウエペケレ」や「アイヌ語」を学びに、多くの人たちが集まる様子が描かれている。B の「若者たち」と「女の人たち」は、B´ では、「和人の若者」、「和人の女性」そして「アイヌの若者」、「アイヌの女性」となっている。また、C は上田が「アイヌ語でおしゃべり」をする様子であり、対する C´ は、上田が「アイヌ語やウエペケレを言う」様子である。さらに、D では、上田にとってアイヌ語は「急にわかったものではない」ことが書かれており、一方の D´ では、それゆえに、上田は、寝ても覚めてもアイヌ語を学んだことが書かれている。そして、E には、上田ははじめ「アイヌ語を知らなかった」とあり、それゆえに E´ にあるように上田は、「アイヌ語を覚えたい」と思ったのである。このように、ここでの上田の挨拶言葉も整った対称構造である。

さらに、B では「若者たち」と「女の人たち」とあるが、B´ では、「和人の若者」、「和人の女性」そして「アイヌの若者」、「アイヌの女性」となっている。ここで、B´ 自体も、「和人の若者と和人の女性」と「アイヌの若者とアイヌの女性」との対句的表現であるとも見て取れる。この箇所の周囲を見渡してみると、次のような対称表現が確認できる。

私が元気でまだお話することができる間に、A アイヌ語でも B ウエペケレでも言いますから、C 和人の若者や和人の女性、C´ アイヌの若者、アイヌの女性、だれであっても、B´ 私のウエペケレや A´ アイヌ語をよく聞いて役立

てください。そのことだけを私は思っています。ありがとうございます。

- A アイヌ語でも
- B ウエペケレでも言う
- C 和人の若者や和人の女性
- C' アイヌの若者、アイヌの女性
- B' 私のウエペケレ
- A' アイヌ語

C・C'には、「和人」と「アイヌ」をそれぞれ対比している。その前には、A「アイヌ語でも」・B「ウエペケレでも」という語順で配置されているが、C・C'の後ろ側では、その語順が逆転し B'「ウエペケレ」・A'「アイヌ語」という並びになっている。その結果として、C・C'を核として交差対句が構築されていると筆者は判断した。

第3項の1から3で紹介したように、三名のアイヌ話者による挨拶言葉は、いずれも、交差対句を主要な修辞様式とした構文からなっており、対称性の際立った表現形態であると言える。

4. おわりに

アイヌ語の日常会話を学習する際、言語の意味や文法が大きな意味を持つことは確認するまでもない。ところが、「生きた」言語としてアイヌ語を理解し、学習するためには、仮に、アイヌの習俗に由来する構文構造があるとするならば、その構文構造を加味した学習が必要であろう。本稿では、アイヌ話者によるいくつかの挨拶言葉の構文に確認できる対称表現を紹介した。今後、より多くのアイヌ口頭文献について検討する予定である。

引用文献

- アイヌ民族博物館編 (1997) 「上田トシのウエペケレ」『アイヌ民族博物館伝承記録』3.1. 財団法人アイヌ民族博物館
- 大喜多紀明 (2011) 『『アイヌ神謡』の修辞パターンから心意を辿る(上) — 『交差対句』を糸口として—』『西郊民俗』217号, 24-32. 西郊民俗談話会
- 田村すず子 (1987) 「福満・鶴川の歌謡: 別れの言葉(散文)」『アイヌ語音声資料』4, 92-94. 早稲田大学語学教育研究所
- 田村すず子 (1988) 「国松さんと幸作さんの昔話: 二風谷・平取: 平村幸作さんの民話(1)」『アイヌ語音声資料』6, 58-63. 早稲田大学語学教育研究所
- 田村すず子 (1989) 「二風谷の昔話と歌謡・神謡: 挨拶」『アイヌ語音声資料』5, 2-3. 早稲田大学語学教育研究所